

# 多摩川流域のサクラの実態調査

平成 21 年度 報告書

森林総合研究所 多摩森林科学園

平成 21 年 12 月

多摩川流域のサクラの実態調査  
平成 21 年度 報告書

目次

1.	はじめに	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 2
2.	調査対象と方法		
2-1.	調査対象	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 2
2-2.	サクラの名所候補地の現地調査方法	・・・・・・・・	p 3
2-3.	サクラの野生個体の現地調査方法	・・・・・・・・	p 9
3.	結果と考察		
3-1.	多摩川流域のサクラの名所	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 10
3-2.	野生のサクラ	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 22
4.	まとめ	・・・・・・・・・・・・・・・・	p 31
・ 図表			
図-1.	調査対象としたサクラの名所候補地 (全体)	・・・・・・・・	p 4
図-2.	調査対象としたサクラの名所候補地 (拡大)	・・・・・・・・	p 5-8
図-3.	今回の調査でランク 1・2 と判定された 多摩川流域のサクラの名所位置	・・・・・・・・	p 14
図-4.	多摩川流域におけるサクラの野生種の想定分布域	・・・・・・・・	p 23
表-1.	調査をおこなった多摩川流域のサクラの名所候補地の タイプ分けとランク	・・・・・・・・	p 11
表-2.	今回の調査で判定された多摩川流域のサクラの名所	・・・・・・・・	p 13
・ 別添資料			
サクラの名所調査地一覧 (平成 19-21 年度)			
サクラの名所平成 21 年度報告写真一覧 (除く平成 20 年度報告分)			

## 1. はじめに

サクラはもともと日本の山野に自生する植物であるが、現在では重要な観光資源でもある。しかしながら、多くの地域において観光資源として活用されているサクラは限定されており、自生のサクラを含めた潜在的な資源は有効に活用されているとは言い難い。将来的に観光資源となりうるサクラの現況について、多くの地域では明らかになっておらず、資源として活用するためには事例研究が必要である。

多摩地域全体の将来の姿を見据えた地域づくりに取り組むため、平成 19 年に設立された「美しい多摩川フォーラム」では、夢のシンボルプランのひとつとして、「多摩川夢の桜街道」プランを計画している。

独立行政法人森林総合研究所多摩森林科学園では、「美しい多摩川フォーラム」と協力し、多摩川流域における野生および植栽されたサクラについて、将来的に観光資源となりうる可能性を考慮して現況を調査することとした。

この調査は平成 19 年度から平成 21 年度までおこなった。平成 19 年度は予備調査として、フォーラム会員となっている各市町村に対してアンケート調査をおこない、基礎的な情報を明らかにするとともに、文献から多摩川流域の野生のサクラについて調査した。平成 20 年度は、こうして得られた基礎資料をもとに、実際にサクラが開花する時期に現地で調査をおこない、現地の実態を把握した。平成 21 年度は、前年度に引き続き現地調査をおこなうとともに、3 ヶ年のとりまとめをおこなった。したがって、今年度の報告書は 3 ヶ年をまとめた報告としたため、前年度までの報告書と一部の内容が重複している。

本調査は「美しい多摩川フォーラム」から助成を受け、独立行政法人森林総合研究所多摩森林科学園がおこなった。とりまとめは森林総合研究所多摩森林科学園教育的資源研究グループ 岩本宏二郎主任研究員、および森林総合研究所森林植生研究領域群落動態研究室 勝木俊雄主任研究員がおこなった。

## 2. 調査対象と方法

### 2-1. 調査対象

調査エリアは、可能な限り広く多摩川流域を網羅することを目的とし、以下の区市町村を対象とした。東京都では、多摩地区のすべての市町村（昭島市、あきる野市、稲城市、青梅市、奥多摩町、清瀬市、国立市、小金井市、国分寺市、小平市、狛江市、立川市、多摩市、調布市、西東京市、八王子市、羽村市、

東久留米市、東村山市、東大和市、日野市、日の出町、檜原村、府中市、福生市、町田市、瑞穂町、三鷹市、武蔵野市、武蔵村山市) および多摩川に面している大田区と世田谷区の合計 32 区市町村、神奈川県では川崎市の 7 区(麻生区、川崎区、幸区、高津区、多摩区、中原区、宮前区)、山梨県では甲州市、小菅村、丹波山村の 3 市村を対象とした(図-1)。なお、甲州市の大部分は富士川流域で占められているため、甲州市の調査対象は多摩川流域周辺に限定した。なお、町田市など調査対象エリアの一部は厳密な地理的には多摩川流域となっていない地域も含まれているが、行政的な意味も含めた広い「多摩地域」の現況を把握することを目的としているので、調査対象としている。

これらのエリアの中から、平成 19 年度にアンケート調査で得られた 67 ヶ所の「区市町村推薦地」を中心に、平成 20 年度は 63 ヶ所 135 点で調査をおこなった。また、「区市町村推薦地」以外でも「参考調査地」として平成 20 年度に 54 ヶ所 114 地点で調査をおこなっている。今年度は、昨年度調査をおこなうことが出来なかった場所に加え、文献やインターネットなどから得られた場所、あるいは現地で情報を得た場所などを含めた場所を「サクラの名所候補地」として、現地調査の対象とした。

また、野生個体調査については上記の調査地とは関係なく、調査エリアを可能な限り網羅するよう調査地域を設定した。

## 2-2. サクラの名所候補地の現地調査方法

調査は、可能な限りサクラが実際に開花している満開の時期に調査地に赴き、以下の 4 項目について調査票に記録するとともに、記録写真を撮影することでおこなった。また、サクラの名所候補地が広く観察ポイントが多い場合、複数地点で現地調査をおこない、実際に「花見」をおこなう立場からサクラがどのような状況なのかを把握することに務めた。

●調査地：現地で確認された調査地の名称、所在地を調査票に記入するとともに、実際に調査をおこなった地点を地図(1/5,000 相当)に記入した。調査地の位置はフリーウェアの簡易 GIS ソフト(カシミール; <http://www.kashmir3d.com/>)を用いて緯度経度と標高を求めた。緯度経度については本来であれば国際基準である WGS84 測地系を用いるべきであるが、国内ではまだ一般的ではなく対照が困難になることが予想されるため、国内で一般的な Tokyo 測地系を用いた。また、調査地の名称・所在地について、現地で



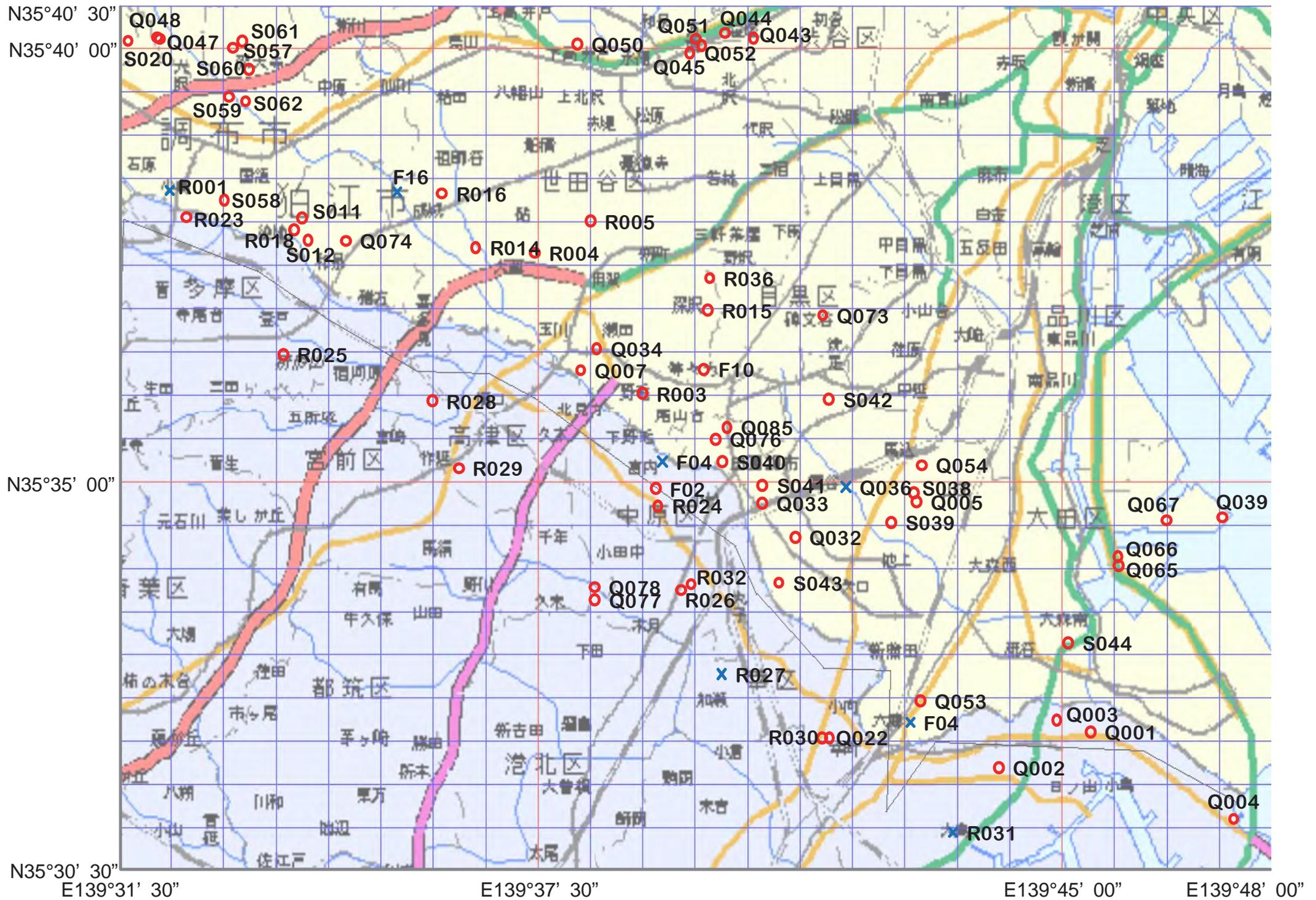


図-2a. 調査対象としたサクラの名所候補地 下流域 (赤丸: 調査済; 青× 未調査)

5km

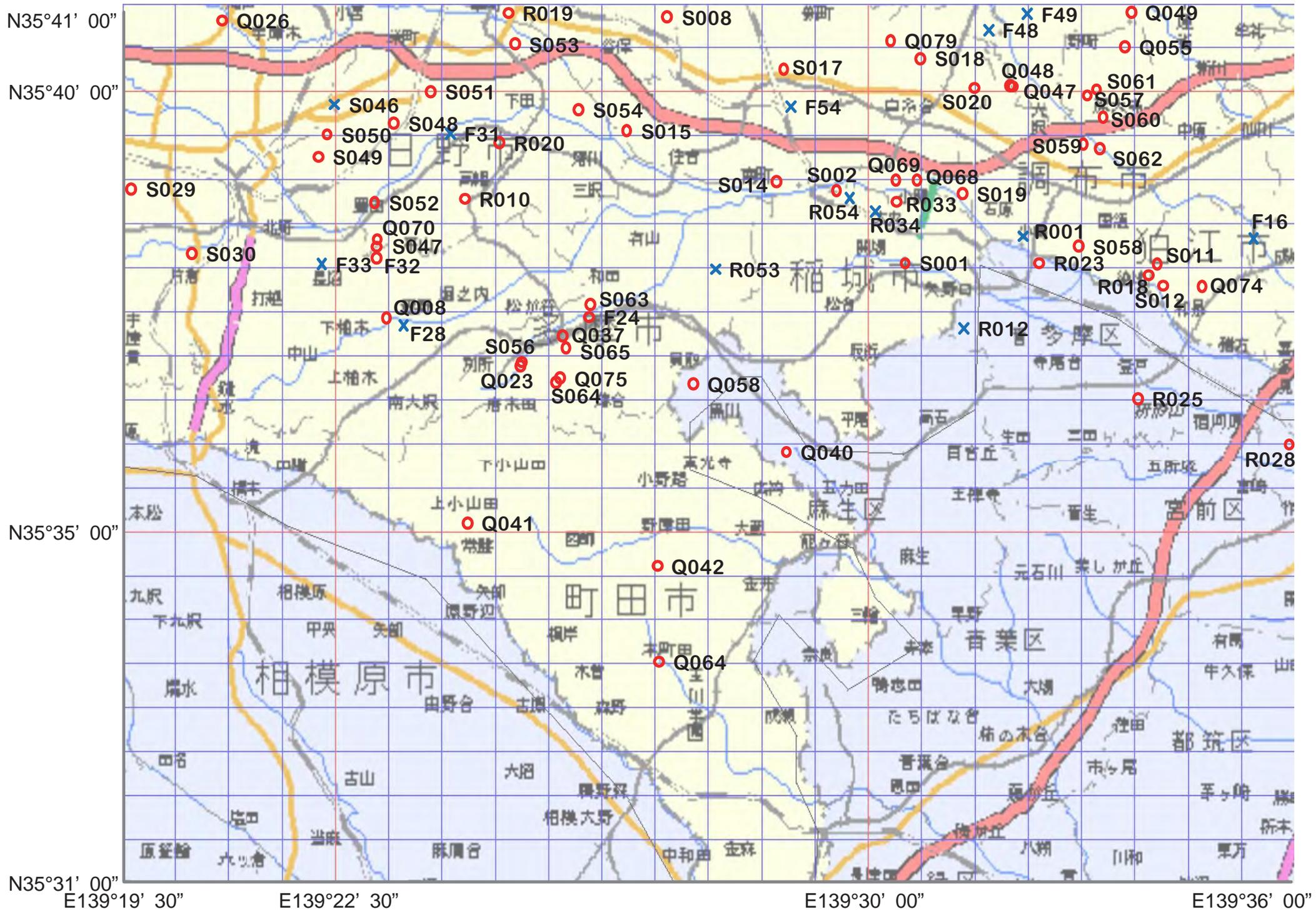


図-2b. 調査対象としたサクラの名所候補地 中流域南 (赤丸: 調査済; 青× 未調査)

5km

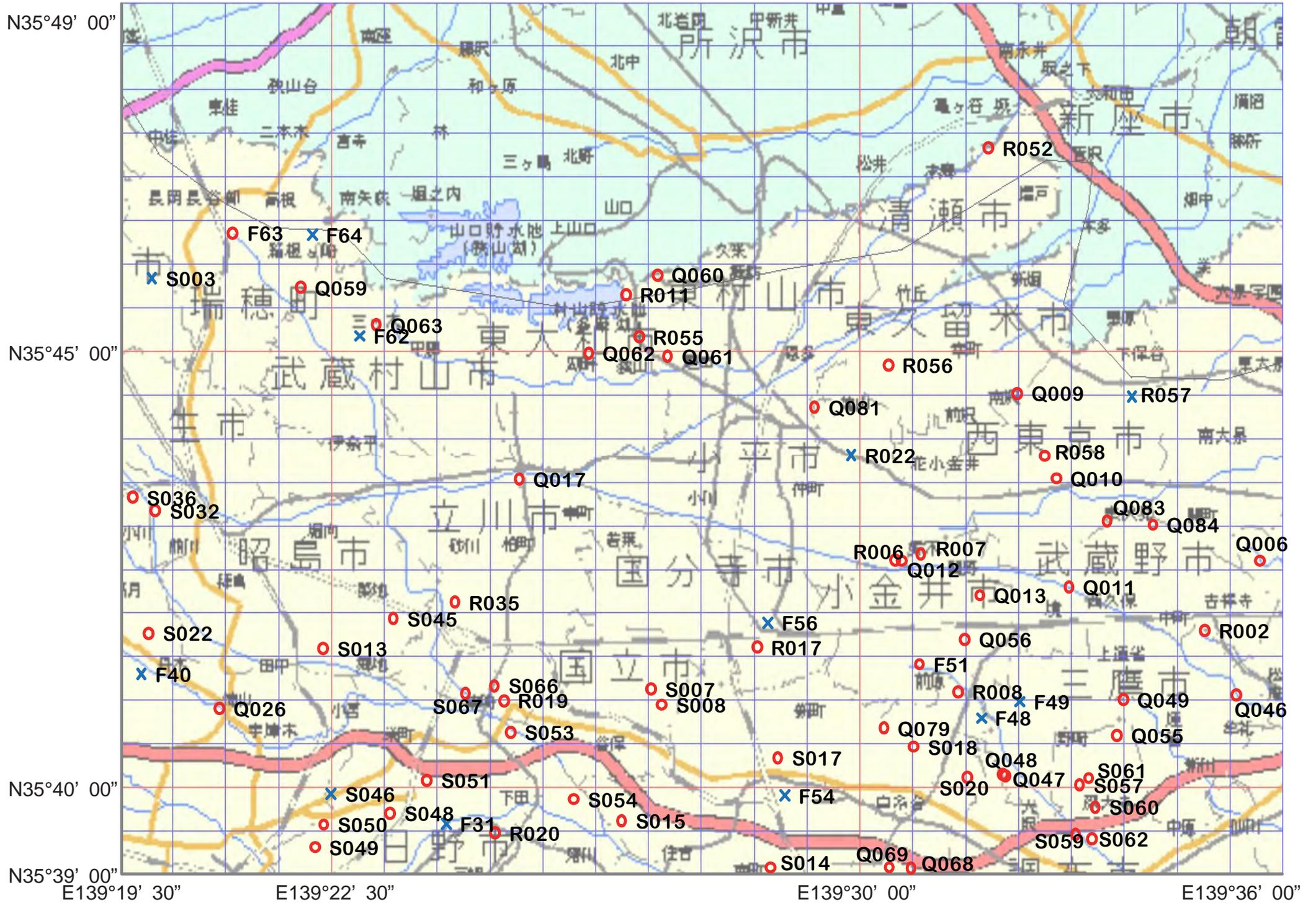


図-2c. 調査対象としたサクラの名所候補地 中流域北 (赤丸:調査済;青×未調査)



図-2d. 調査対象としたサクラの名所候補地 上流域 (赤丸: 調査済; 青× 未調査)

10km

不明であった場合はその後地図や文献などから得た。

●サクラ：サクラの名所候補地を代表すると思われる 1 点で直接目視できる程度の範囲（半径数十 m）のサクラについて、サクラの種類、本数、胸高直径、開花状況、健全度、腐朽・病害虫の有無などを記録した。調査対象が広大な場合、多くのサクラの見物客が訪れると思われる数点で調査をおこなった。なお、サクラの種類については同定が困難である場合が予想されたので、可能な限り花の写真を撮影して、後日照会した。

●管理状況：剪定や支柱、保護の有無や表土の露出部分のパーセンテージ、表土の状態や立地を記録した。なお、サクラの管理については、土壌状態に深刻な問題がある場合が多いため、可能な限り根元付近の様子を写真で撮影した。

●利用状況：サクラを見るためにかかる利用料や一般利用者が利用できる駐車場の有無、公共交通機関を利用したアクセス方法と時間、「花見」のためのイベントなどについて記録した。またその他に「花見」に関して気がついた点があれば記録した。

これらの実測記録から、多摩川流域におけるサクラの名所候補地の分析を試み、その特徴を明らかにした。

### 2-3. サクラの野生個体の現地調査方法

野生個体の調査では、可能な限りサクラ類が開花している時期に、徒歩あるいは車で調査対象エリアを踏査し、実際に咲いているサクラの種類・開花状態などを記録した。また位置については GPS を用いて測定し、簡易 GIS ソフトを用いて緯度・経度・標高を特定した。なお、種類についてはその場で同定が困難である場合もあるため、可能な限り花の拡大写真を撮影した。

こうして得られたデータを用い、サクラ類の各種類について、観察された水平位置・標高・開花状況のデータから、どのような範囲に分布し、どのような時期に開花するのか、分析した。

### 2-4. サクラの名所候補地のタイプ分けとランク付け

多摩川流域全体のサクラの観光的価値を考えるために、サクラの名所候補地のタイプ分けとランク付けをおこなった。平成 20 年度の報告書において、立地環境は堤防・水路タイプと街路・並木タイプ、公園・施設タイプ、寺社・名木タイプの 4 タイプにまとめられることを示した。今年度は調査をおこなったす

すべての調査箇所について、このタイプ分けを複数の調査者の話し合いによりおこなった。なお、調査箇所によっては、複数のタイプの性質を併せ持つ場合もあるので、そうした調査地はそれぞれのタイプを併せ持つものとして集計した。

観賞価値のランクについては、単純に基準を設けることは困難であるが、以下のような観点から、観賞価値のランクを複数の調査者の話し合いで判断した。**1(全国レベル):**他に類似した観賞価値をもつ名所はなく全国から花見客が来る名所、**2(都県レベル):**高い観賞価値をもち、遠方からでも花見客が来る名所、**3(市町村レベル):**観賞価値があり、留まる花見客がいるサクラ、**4(ご近所レベル):**観賞価値は低く、花見客は通り過ぎるサクラ、と基準を設けた。また、観賞価値については、主に次のような点から評価した。

- ・ 植栽面積・密度、樹木のサイズなどが大きく圧倒される
- ・ 湖沼や河川・建築物・花木・草本などとの複合的な景観が楽しめる
- ・ ‘染井吉野’ 以外のサクラで花の色の違いや形の違いを楽しめる
- ・ 樹形が美しく、健全に生育している
- ・ 人との関わりについての歴史的・学術的な由来をもつ

### 3. 結果と考察

#### 3-1. 多摩川流域のサクラの名所

平成 20 年度の報告では、平成 19 年度の調査で得られた 67 ヶ所のうち、4 ヶ所を除く 63 ヶ所 135 地点に対する現地調査の結果を示した。平成 21 年度はこれに 126 ヶ所 381 地点を加え、合計 189 ヶ所 516 地点の調査結果を得た（図-1・図-2 a~d）。なお、文献などで情報を得られたが未調査の箇所は 28 ヶ所残された。調査された 189 ヶ所のサクラの名所候補地について、多摩川流域全体のサクラの観光的価値を考えるために、タイプ分けとランク付けをおこなった（表-1）。当然ながら、サクラの楽しみ方には個人差があるもので、この結果は調査者らの主観が入った評価である。また、調査箇所も多摩川流域を完全に網羅したものではないことから、絶対的な結果として考察することは適切ではない。ただしある程度多摩川流域全体の状況を把握する指標として、考察に値するものと思われる。

この結果によると、6 ヶ所がランク 1、52 ヶ所がランク 2 として評価された。もちろん残りの 131 ヶ所もサクラを楽しめる場所ではあるが、市町村レベルあるいはご近所レベルは基本的には地元住民が対象となる。他地域からの観光客

あるいは広域の住民に対する観光資源としてのサクラということであれば、このランク 1・2 の合計 58 箇所を現在の「多摩川のサクラの名所」としてとらえることができると考えられる。そこで、以下はこの 58 箇所（表－2；図－3）を中心に考察をおこなった。

表－1. 調査をおこなった多摩川流域のサクラの名所候補地のタイプ分けとランク

タイプ	ランク			
	1	2	3	4
堤防・水道タイプ	2	12	26	8
街路・並木タイプ	2	10	15	9
公園・施設タイプ	3	23	46	15
寺社・名木タイプ	0	17	18	10
合計#	6	52	90	41

#複数のタイプが重なる場合はそれぞれのタイプごとに重複して集計しているため、タイプ区分ごとの数の総計と合計数は一致しない

**位置：**昨年度の報告で指摘されているように、区市町村推薦の 67 ヶ所は小菅村と奥多摩町の 3 ヶ所を除くと中・下流域に集中していた。そこで、今年度は努めて上流域の調査に努めたことに加え、区市町村推薦の範囲外であった世田谷区や町田市・川崎市などの区域を加えたことから、対象エリアの多摩川流域のほぼ全体で調査されたものと考えられた（図－1）。なお昨年度に報告したように、今回の調査において最も下流で‘染井吉野’が確認された場所は川崎区の浮島町公園（標高 3m 写真－1）であり、上流で



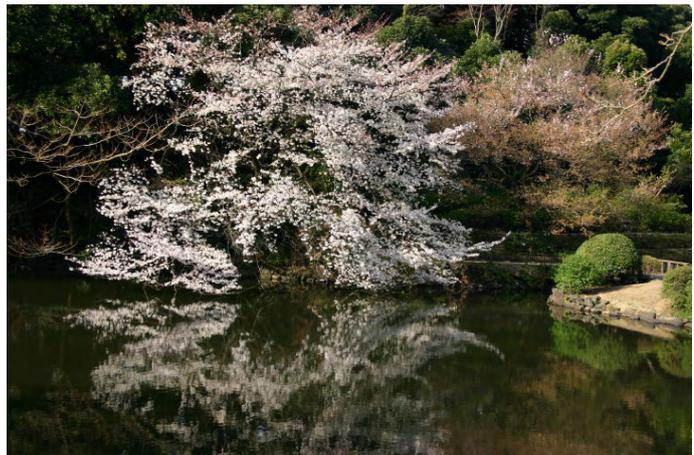
写真－1. 浮島町公園の‘染井吉野’



写真－2. 一ノ瀬高原の‘染井吉野’

は甲州市の一ノ瀬高原（標高 1252m 写真－2）であった。

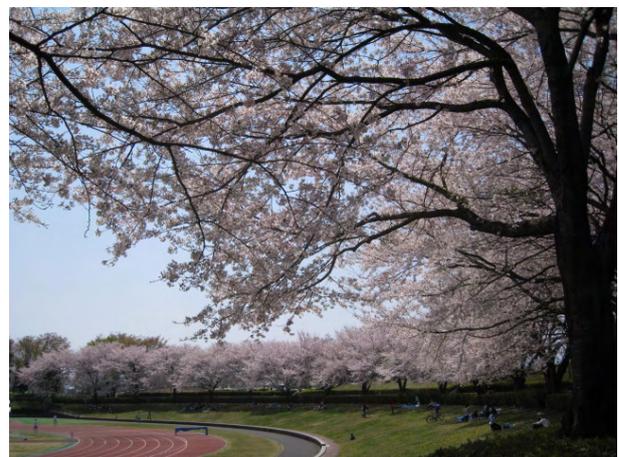
また、今回選定した 58 箇所の「多摩川のサクラの名所」の中では最下流は川崎市川崎区の殿町堤防の‘染井吉野’並木、最上流は甲州市の笠取小屋のタカネザクラ集団（写真－23）となった。この間のおよそ 100km が多摩地域のサクラの範囲として認識される。なお、多摩川流



写真－3. 新宿御苑の玉藻池の‘小彼岸’

域として玉川上水を含めると、玉川上水の終点である新宿御苑（写真－3）も多摩川流域のサクラの名所として取り扱ってもよいと考えられる。また、正確には多摩川流域の今回の調査エリアの外に位置するが、甲州市の雲峰寺は多摩川流域では確認できなかったエドヒガンの巨樹が確認されたことから、「多摩川のサクラの名所」に含めることとした。

**サクラの種類：**今回現地調査をおこなった 516 地点のうち、51%の 265 地点のサクラが‘染井吉野’（写真－4）であった。また、1・2 ランクとされる 58 ヶ所のうち、‘染井吉野’が主体となっている名所は 31 ヶ所と約半数であった。昨年度報告した市町村推薦の 67 ヶ所ではおよそ 2/3 が‘染井吉野’であったので、相対的にその割合は減少している。これは意識して一般的な‘染井吉野’植栽地とは異なる特徴をもつ場所を調査箇所として選択し、評価も高くしたことにも影響されているとも考えられる。



写真－4. 秋留台公園の‘染井吉野’の並木

‘染井吉野’以外では ‘枝垂桜’ や‘八重紅枝垂’、‘アメリカ’、‘関山’、‘御衣黄’、‘小彼岸’、‘大寒桜’、‘普



写真－5. 光厳寺のヤマザクラ

表-2. 今回の調査で判定された多摩川流域のサクラの名所

ID	名称	都県	区市町村	タイプ	ランク	コメント
S007	大学通り緑地帯	東京都	国立市	街路	1	‘染井吉野’の古木の並木
Q080	奥多摩湖周遊道路	東京都	奥多摩町	街路	2	奥多摩湖周辺の展望と多様なサクラ
R016	成城学園前駅	東京都	世田谷区	街路	2	住宅地の‘染井吉野’の古木並木
S041	桜坂	東京都	大田区	街路	2	歌でよく知られている‘染井吉野’の並木
S018	多磨霊園	東京都	府中市	街路・公園	1	大規模な墓地と‘染井吉野’やサトザクラの古木
F02	等々力緑地	川崎市	中原区	街路・公園	2	野球場・競技場などの施設と‘染井吉野’
Q041	尾根緑道	東京都	町田市	街路・公園	2	戦車道と多様なサクラ
Q065	京浜島	東京都	大田区	街路・公園	2	多摩川流域最下流の‘染井吉野’とオオシマザクラ
Q084	武蔵野中央通り	東京都	武蔵野市	街路・公園	2	大規模な‘染井吉野’の古木並木
R028	緑ヶ丘霊園	川崎市	高津区	街路・公園	2	大規模な墓地と‘染井吉野’の古木
S059	ハリウッドの桜	東京都	調布市	街路・公園	2	‘大寒桜’と‘染井吉野’の並木
Q028	一ノ瀬高原	山梨県	甲州市	街路・寺社	2	オオヤマザクラ・カスミザクラと最上流の‘染井吉野’
Q087	新宿御苑	東京都	新宿区	公園	1	大規模な都市公園の‘染井吉野’や多様なサトザクラの古木
S026	多磨森林科学園	東京都	八王子市	公園	1	栽培品種のコレクション
Q030	人里バス停	東京都	檜原村	公園	2	古いバス待合所と‘八重紅枝垂’
Q082	笠取小屋	山梨県	甲州市	公園	2	タカネザクラの群生地
R002	井の頭恩賜公園	東京都	武蔵野市	公園	2	武蔵野台地の湧水池と‘染井吉野’の古木
R005	馬事公苑	東京都	世田谷区	公園	2	乗馬場と‘染井吉野’の古木
R007	小金井公園	東京都	小金井市	公園	2	大規模な都市公園と多様なサクラ
R008	武蔵野公園	東京都	小金井市	公園	2	苗木生産の歴史と多様なサクラ
R011	狭山公園	東京都	東村山市	公園	2	ダム周囲の広大な空間と‘染井吉野’
R035	昭和記念公園	東京都	立川市	公園	2	大規模な都市公園の多様なサクラ
R036	駒沢オリンピック公園	東京都	世田谷区	公園	2	大規模な都市公園の多様なサクラ
R058	東大田無農場	東京都	西東京市	公園	2	農場と‘染井吉野’の古木
S009	三ツ子山	山梨県	小菅村	公園	2	エドヒガン・マメザクラ・チョウジザクラの自生と大規模な‘染井吉野’の植栽
S039	池上本門寺	東京都	大田区	公園	2	五重塔と‘染井吉野’
S042	洗足池公園	東京都	大田区	公園	2	武蔵野台地の湧水池と‘染井吉野’の古木
S055	奥多摩湖の桜	東京都	奥多摩町	公園	2	ダム湖と大面積の‘染井吉野’などのサクラ
S057	神代植物公園	東京都	調布市	公園	2	多様なサクラ
Q016	海禅寺	東京都	青梅市	寺社	2	寺院の‘枝垂桜’の大木
Q019	牛会桜	山梨県	小菅村	寺社	2	野生のエドヒガンの大木
Q031	高橋寺	山梨県	甲州市	寺社	2	寺院とエドヒガンの大木
Q038	安楽寺	東京都	青梅市	寺社	2	寺院の‘枝垂桜’の大木と花木園地
R013	梅岩寺	東京都	青梅市	寺社	2	寺院の‘枝垂桜’の大木
R014	妙法寺	東京都	世田谷区	寺社	2	都市の中の閑静な庭園とサクラ
R039	雲峰寺	山梨県	甲州市	寺社	2	エドヒガンの巨樹
R050	金剛寺	東京都	青梅市	寺社	2	寺院の‘枝垂桜’の大木
S024	円通寺	東京都	八王子市	寺社	2	寺院の‘枝垂桜’の大木
S025	広園寺	東京都	八王子市	寺社	2	寺院の‘枝垂桜’の大木
S027	浄福寺	東京都	八王子市	寺社	2	寺院の‘枝垂桜’の大木
S031	高楽寺	東京都	八王子市	寺社	2	寺院の‘枝垂桜’の大木
S033	光厳寺	東京都	あきる野市	寺社	2	ヤマザクラの巨樹
S056	川井家のシダレザクラ	東京都	多摩市	寺社	2	‘枝垂桜’の巨樹
R006	小金井堤	東京都	小金井・小平市	堤防	1	玉川上水とヤマザクラの歴史
S005	羽村堰と玉川上水	東京都	羽村市	堤防	1	玉川上水と‘染井吉野’の古木
F51	野川沿いの紅枝垂れ桜	東京都	小金井市	堤防	2	‘八重紅枝垂’の河川沿い並木
Q003	殿町堤防	川崎市	川崎区	堤防	2	多摩川最下流の堤防の‘染井吉野’並木
Q011	武蔵野桜通り	東京都	武蔵野・三鷹市	堤防	2	玉川上水のヤマザクラや‘染井吉野’などの並木
Q061	多磨湖自転車道東村山	東京都	東村山市	堤防	2	武蔵野の風景と水道用地とサクラ
R019	根川緑道	東京都	立川市	堤防	2	水辺のふれあい空間と‘染井吉野’の古木
R052	清瀬台田圃地	東京都	清瀬市	堤防	2	富士山が見える広い河原と‘染井吉野’
S001	三沢川側道	東京都	稲城市	堤防	2	河川と‘染井吉野’の管理された人工美
S013	多摩川左岸堤防	東京都	昭島市	堤防	2	堤防と‘染井吉野’の並木
S032	福生堤防	東京都	福生市	堤防	2	堤防と‘染井吉野’の並木
S062	野川榎橋	東京都	調布市	堤防	2	河川沿いの‘染井吉野’の古木並木とライトアップ
S040	多摩川台公園	東京都	大田区	堤防・公園	2	多摩川と鉄道と‘染井吉野’
S067	柴西公園	東京都	立川市	堤防・公園	2	残堀川沿いの‘染井吉野’並木

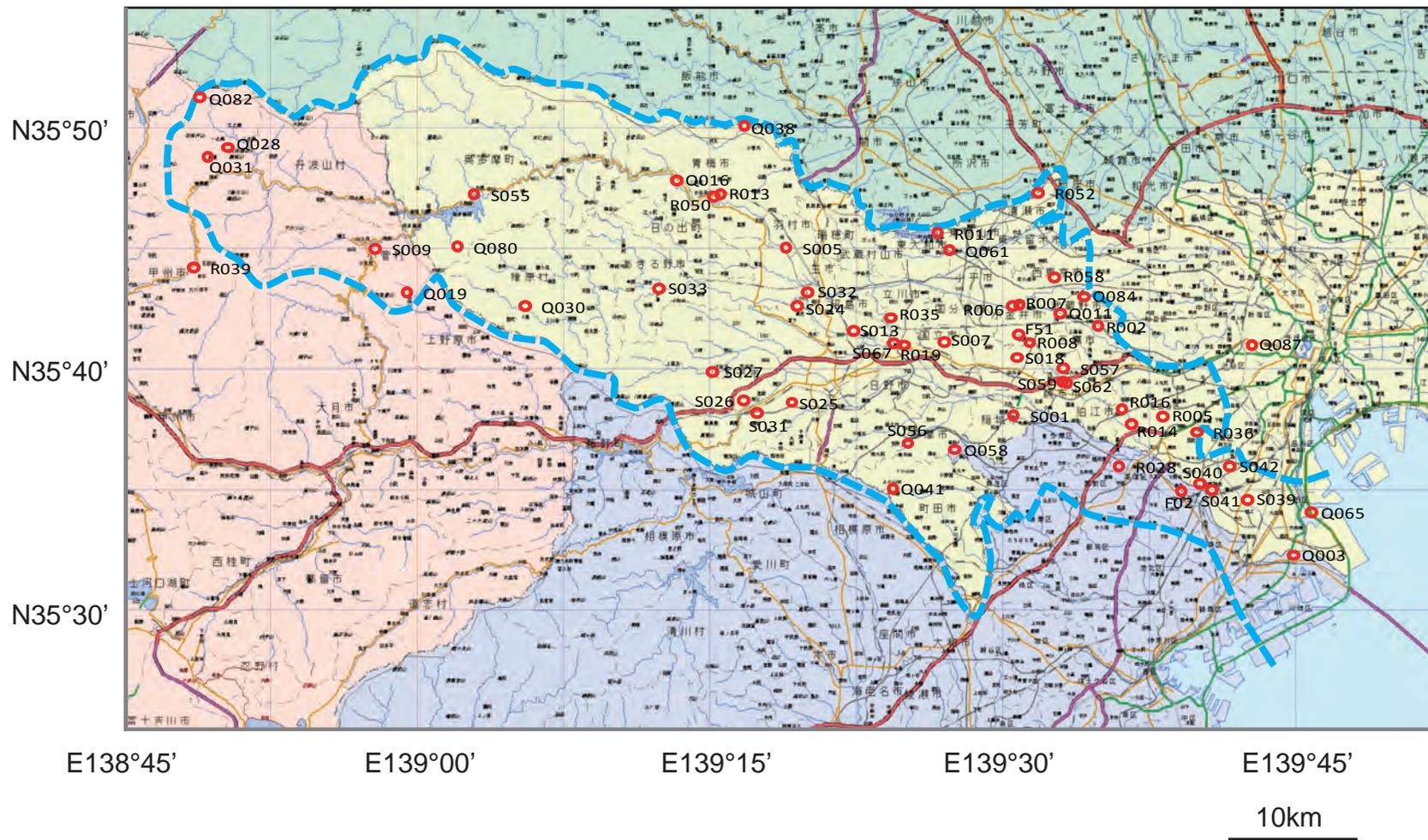


図-3. 今回の調査でランク1・2と判定された多摩川流域のサクラの名所位置（赤丸）

賢象’、‘一葉’などの栽培品種やオオシマザクラやヤマザクラ、オオヤマザクラ、カスミザクラが植栽されている例があったほか、自生のエドヒガンやヤマザクラ（写真－5）、マメザクラ、タカネザクラなども見られた。なお、本数で見ると、記録されている約 13,000 本のうち、およそ 86%とその大部分が‘染井吉野’であり、多摩地域のサクラの植栽地において‘染井吉野’が圧倒的に多いことが示された。なお、その他の栽培品種でもっとも多い‘八重紅枝垂’でも約 1%程度であり、‘染井吉野’以外は少数であることが示された。

**サクラの本数：** 今回の現地調査では、1 点から見える範囲でサクラの本数を測定するという手法を用いたため、最大でも 100 本程度と名所内の最大本数 10,000 本と比較すると少なくなっている。ただし本数が多い場所の多くは並木あるいは公園などにまとめて植栽された‘染井吉野’であった（写真－4）。



写真－6. 川井家のシダレザクラ

一方八王子市の高楽寺の‘枝垂桜’やあきる野市の「光厳寺のヤマザクラ」（写真－5）、多摩市の「川井家のシダレザクラ」（写真－6）のように、1 本あるいは、少数であっても「花見」の対象となるような観賞価値の高い木もあった。最終的なランク付けの評価では、本数が多いほど評価が高いということにはなかった。

**サクラのサイズ：** サクラのサイズにおいて最大であったものはあきる野市の「光厳寺のヤマザクラ」（写真－5）の胸高直径約 170cm であった。次に大きなサイズは多摩市の「川井家のシダレザクラ」（写真－6）の胸高直径約 110cm であるので、「光厳寺のヤマザクラ」の大きさは際だっている。その他、環境省の定める巨樹の基準である胸高周



写真－7. 雲峰寺のエドヒガンの巨樹

囲長 300cm を超えるような個体は、川崎市麻生区のヤマザクラおよび調査対象エリアからやや外れる甲州市の「雲峰寺のサクラ」のエドヒガン（写真－7）

が確認された。しかしながら、目測で **80cm** ほどの個体として、あきる野市の小峰公園‘染井吉野’や日野市の旭が丘グリーンベルトの‘染井吉野’、調布市の神代植物公園の‘染井吉野’などが記録されており、今後は「巨樹」クラスの‘染井吉野’が多く出現することも予想される。最終的なランク付けの評価では、サイズが大きいほど評価が高く、観光資源としては重要な指標と考えられた。

**サクラの開花日：** 開花時期の概要を把握するために、各調査地点における‘染井吉野’の開花状況から満開日（木全体のおよそ **8 割**が開花した日）を推定し、調査地点の標高との関係性を求めた。**2008 年**の場合、もっとも早い満開日は狛江市の根川さくら通りなどの **3 月 26 日**であり、もっとも遅い満開日は甲州市一ノ瀬高原の **5 月 3 日**であった。**2009 年**もほぼ同様の傾向で、大田区城南島などで

**3 月 28 日**が早く、甲州市一ノ瀬高原で **4 月 26 日**であった。多くの調査地において満開日と標高との間には強い相関が見られた。この結果、多摩川流域においては高標高域まで含めると、およそ **40 日間**にわたって、‘染井吉野’が観賞できることが示された。また、‘染井吉野’より早咲きの‘寒桜’は新宿御苑で



写真－8. 奥多摩湖の‘染井吉野’にみられたてんぐ巣病

**1 月下旬**、もっとも遅い笠取小屋のタカネザクラは **5 月中旬**が見頃である。その他‘小彼岸’や‘関山’、‘普賢象’などの栽培品種や未調査エリアを含めると、**1 月**から **6 月**までなんらかのサクラが多摩川流域で開花していることになる。ただし、標高 **600m** を超える高標高域ではほとんどサクラの植栽地はなく、自生のサクラとなる。

**病虫害：** サクラに対する病虫害として、てんぐ巣病が **40 地点**から報告された（写真－8）。大部分は‘染井吉野’が罹病していた



写真－9. 池上本門寺の‘染井吉野’にみられた外科的保全処理のあと

が、ひとつだけ‘小彼岸’が罹病している例も確認できた。てんぐ巣病が発生する地点の特徴として空中湿度が高いことが指摘されている。2008年度の調査結果からは、標高120m以下の中・下流域の‘染井吉野’では64地点中2地点しかてんぐ巣病は確認できなかったが、標高120m以上の山間部では27地点中11地点の高い頻度でてんぐ巣病が確認された。高標高域では管理がなされていない場合が多いことも要因のひとつであるが、てんぐ巣病が発生しやすい環境条件であることが示されている。また、幹の腐朽が見られたほか、コスカシバなどの虫害跡も確認されたが、もっとも深刻な病虫害は‘染井吉野’に対するてんぐ巣病と考えられた。

**管理状況：** 今回の調査では概観から管理状況を推測したため、下草刈りや防虫剤、施肥などについてのデータは得られなかったが、剪定作業については多くの調査地でおこなわれていることが確認された。ただし、支柱を用いる等、なんらかの外科的保全処理など積極的な管理が確認された例は少なかった。なお、外科的保全処理は、あきる野市の光厳寺、大田区の池上本門寺（写真-9）・洗足池公園などで見られた。また、表土の状態をみると、公園タイプでは踏み固められた不健全な土壌である場合が多く、劣悪な生育環境であることが示された。さらに街路タイプでは特に踏み固められた不健全な土壌が多い上に、露出している表土が少ないことが示され



写真-10. 三沢川側道のオオシマザクラの根元



写真-11. 住吉ざくらの‘染井吉野’の根元



写真-12. 梅岩寺の‘枝垂桜’ 根元に人が歩いている

た（写真－10・11）。堤防においても特に道路と隣接している場合は同様に踏み固められ、露出している表土も少ない。また、比較的表土が多く露出している寺社タイプでも、根元の周りを囲わずに人が歩けるようになっている場合もある（写真－12）。名所とされた58ヶ所でも、その大部分の植栽環境が良好ではないことは、今後の大きな問題であると考えられる。なお、‘染井吉野’は短命であると誤解されているが、まったくの俗説であり、科学的な根拠はない。実際に多摩川流域でも新宿御苑や国立の大学通りでは戦前に植栽された‘染井吉野’が現在でも健全に生育している。‘染井吉野’が短命と誤解を受ける理由のひとつは、既に述べたように劣悪な環境に植栽され、その後も適切な管理がおこなわれずに枯死に至るからである。道路脇や高標高地など劣悪な環境をもつ場所における‘染井吉野’は樹形が整わない（写真－13）ことが多く、その観賞価値は低い。今後は、道路脇や高標高地など劣悪な環境をもつ場所における‘染井吉野’の植栽・維持は慎むべきだと考えられる。



写真－13. 奥多摩湖周遊道路沿いの‘染井吉野’

も、その大部分の植栽環境が良好ではないことは、今後の大きな問題であると考えられる。なお、‘染井吉野’は短命であると誤解されているが、まったくの俗説であり、科学的な根拠はない。実際に多摩川流域でも新宿御苑や国立の大学通りでは戦前に植栽された‘染井吉野’が現在でも健全に生育している。‘染井吉野’が短命と誤解を受ける理由のひとつは、既に述べたように劣悪な環境に植栽され、その後も適切な管理がおこなわれずに枯死に至るからである。道路脇や高標高地など劣悪な環境をもつ場所における‘染井吉野’は樹形が整わない（写真－13）ことが多く、その観賞価値は低い。今後は、道路脇や高標高地など劣悪な環境をもつ場所における‘染井吉野’の植栽・維持は慎むべきだと考えられる。

**利用状況：** 駐車場については記録されていた駐車場はすくなく、駐車場がない、もしくはあっても使えない状況であり、「花見」客にとって公共の交通機関が重要であることが示された。また、「サクラまつり」などなんらかの「花見」に関するイベントをおこなっていた場所も、少なかった。調布市の神代植物公園や



写真－14. 滝山自然公園における花見イベント

八王子市の滝山自然公園（写真－14）、大田区の洗足池公園などのような公園のほか、羽村市の羽村堰と玉川上水や福生市の福生堤防のように堤防をもちいたイベントが確認された。ただし、いずれも地元住民向けの小規模なイベントであり、観光客対象の大規模なイベントは確認できなかった。

立地環境：

●堤防・水路タイプ



写真－１５ 多摩川本流の福生堤防の‘染井吉野’



写真－１６．福生市境の玉川上水の‘染井吉野’

多摩川の本流が多摩地域におけるもっとも大きな河川である。したがって、福生市や川崎市殿町における本流の堤防に植栽された‘染井吉野’の並木は多摩川流域のサクラを代表する景観である(写真－１５)。

しかし、野川や三沢川、根川など多摩川に流入する支流や、玉川上水(写真－１６・１７)や二ヶ領用水など多摩

川から引かれた水道沿いに植栽されたサクラこそが、他地域と比較した場合、多摩川流域のサクラを特徴付けるものであると考えられる。古くは小金井市の玉川上水(写真－１７)などヤマザクラなども植栽されていた例も見られるが、現在ではその多くは‘染井吉野’が列状に植栽されている(写真－１６)。ただし堤防は車道や歩道としても利用されており、サクラの生育環境としては適切な環境が保たれていないケースが大部分であった。また、大田区の馬込桜並木のように、植栽当時は小



写真－１７．小金井門の玉川上水のヤマザクラ



写真－１８．多摩湖自転車道の東村山市の‘染井吉野’

川沿いであったものがその後の暗渠化で街路の並木になっているケースもみられたほか、多摩湖自転車道のように水道施設の上につくられた遊歩道沿いの並木（写真－１８）もみられた。なお、小金井市の玉川上水では昭和初期にはサクラの名所として有名になり、国の名勝にも指定されたが、現在では当時のサクラはほとんど枯死している。現在堤防・水路タイプでは、老齢のサクラが増加しており、どのような管理をおこなってサクラに好適な環境を維持していくのが、今後の大きな問題であると考えられる。

### ●街路・並木タイプ

国立市の大学通り（写真－１９）や府中市のスタジアム通りなど街路樹として植栽されたサクラの並木のタイプである。上記の堤防に平行している道路沿いの並木も、街路の並木としての性格を併せ持つことも多い。街路・並木タイプは、堤防・水路タイプと同様に‘染井吉野’が植栽される場合が多く、こうした‘染井吉野’並木は日本全国で見られる。したがって、際だった特徴を持つものではないが、身近に見られるサクラとしての価値はある。車道沿いであることが原則なので、露出した地表は少なく植栽環境としては堤防よりも悪いケースが多く、管理上の問題点が多い。戦前から維持されている国立市の大学通り緑



写真－１９．大学通りの‘染井吉野’並木



写真－２０．桜坂の‘染井吉野’並木

地帯（写真－１９）は、街路でも幅広の緑地帯に植栽されており、比較的良好な環境をもつ。こうした事例は例外的であり、大部分の街路タイプは、大田区の馬込桜並木やガス橋緑地のように、今後衰退して枯死する個体が増加することが予想される。歌謡曲で極めて著名な桜坂（写真－２０）の‘染井吉野’並木も、やや衰退しており、植栽環境に大きな問題があると思われる。

## ●公園・施設タイプ

八王子市の滝山自然公園や調布市の神代植物公園のように、公園あるいは公共の施設内に多数のサクラを植えるタイプである。堤防や道路の並木とは異なり、サクラの下は自由に利用できる空間となっている場合が多く、「花見」として利用されるケースはこのタイプが多い

と考えられる。しかしその反面、土壌が踏み固められて劣悪になっているケースが多いことが観察されており、将来は衰退して枯死する個体が増加することも考えられ、土壌の管理が今後の大きな問題になると考えられる。

‘染井吉野’が多量に植栽されている場合が最も多い（写真－4）が、ヤマザクラやオオシマザクラ、あるいは‘八重紅枝垂’や‘普賢象’などの栽培品種など様々な種類のサクラが植栽されることもある。多摩森林科学園のサクラ保存林（写真－21）は全国からサクラの名木や栽培品種を収集したもので、他に類をみないものである。また、多磨霊園（写真－22）は1923年

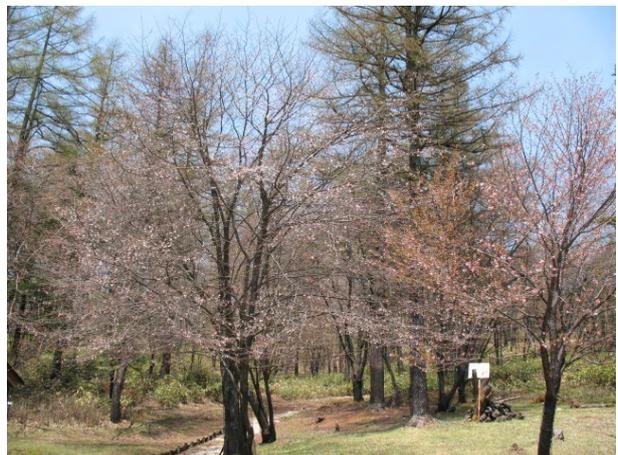
に開設された日本初の公園墓地であり、その参道を含めてサクラの老木が多く残されている。墓地のサトザクラは観賞価値が高い風景であると思われる。また、本来は公園とするべきではないが、企業などの施設内の植栽地や、自生のサクラの集団（写真－23）もこのカテゴリーに加えた。



写真－21. 多摩森林科学園のサクラ保存林



写真－22. 多磨霊園の‘一葉’の古木



写真－23. 笠取小屋付近のタカネザクラ

### ●寺社・名木タイプ

あきる野市の光厳寺(写真-5)や多摩市の「川井家のシダレザクラ」(写真-6)など1本あるいは少数のサクラが観賞の対象となっているものである。植栽された‘染井吉野’が単木として注目されている例は少なく、寺院や神社のエドヒガン(含む‘枝垂桜’)やヤマザクラの老木であるケースが多い。集客力がある観光資源としてサクラが取り上げられる場合、全国的には「根尾の薄墨桜」や「三春の滝枝垂」のようにこの寺社・名木タイプであることが多い。隣の山梨県でも雲峰寺のエドヒガンの巨樹(写真-7)のように、大部分がこのタイプに区分されるように思われる。



写真-24. 海禅寺の‘枝垂桜’

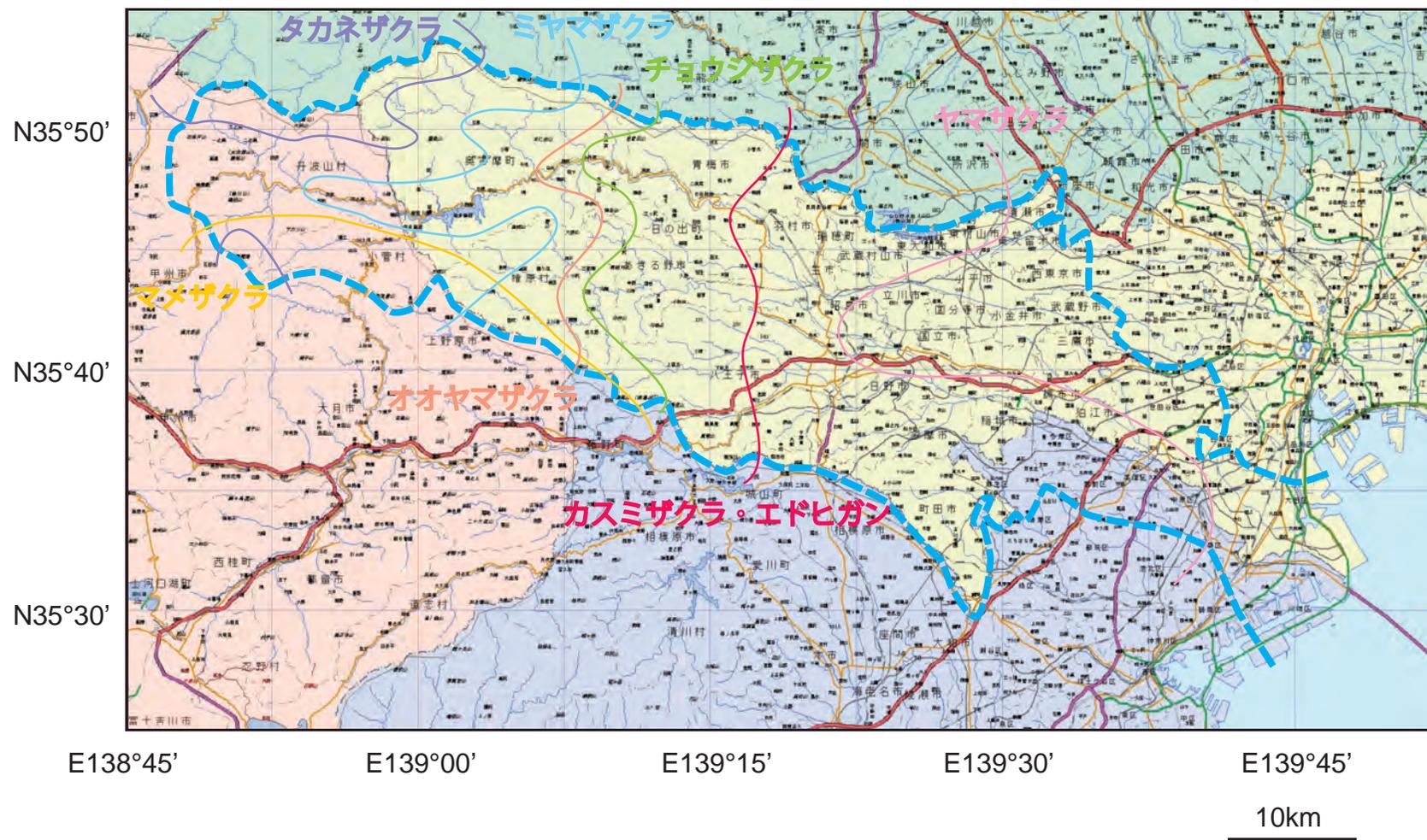


写真-25. 高橋寺のエドヒガン

しかしながら多摩川流域における今回の調査では、意識して調査をおこなってもこのタイプは計45ヶ所と最も少なく、ランク1の名所は認められなかった。多摩川流域では巨木サイズの個体が4個体しか確認できなかったように、こうした寺社・名木タイプが少ないという点は特徴的であった。ただし、さらに詳細な調査をおこなえば、海禅寺の‘枝垂桜’(写真-24)や高橋寺のエドヒガン(写真-25)のように、現在は巨樹サイズではないが、大木であり将来は巨樹サイズとなるサクラが、新たに確認されると思われる。

### 3-2. 野生のサクラ

野生のサクラについて調査した結果、調査エリアから野生のヤマザクラ・カスミザクラ・オオヤマザクラ・エドヒガン・チョウジザクラ・ミヤマザクラ・マメザクラ・タカネザクラの合計8種が確認された。それらの分布域はほぼ標高で規定されているが、マメザクラだけは多摩川流域の南部に限定されていると考えられた(図-4)。以下、各種の分布と開花期の特徴、および観光資源と



図ー4. 多摩川流域におけるサクラの野生種の想定分布域（いずれも各種のラインより西側に分布  
ただし、マメザクラはラインの南側、タカネザクラはラインの内側）

しての特徴について簡単に記述する。

●ヤマザクラ *Cerasus jamasakura* (Siebold ex Koidz.) H.Ohba var. *jamasakura*

ヤマザクラは大田区・川崎市から甲州市で確認され、出現した種のうちもっとも広い範囲に分布していることが示された。標高およそ 100～900m の間に出現しており、多摩川流域の丘陵部から山地ではふつうに見られる種である。コナラなどと同様に二次林を構成する種のひとつでもあり、生育可能な環境は山地ではきわめて広い。ただし、都市部では天然生の二次林は大きく失われており、ヤマザクラの分布地も分断されている。もっとも下流の野生のヤマザクラは川崎市中心区および大田区の丘陵部の二次林で確認された(写真-27)。町田市では4月2日頃、奥多摩町では4月24日頃が満開なので、お



写真-26. ヤマザクラの花

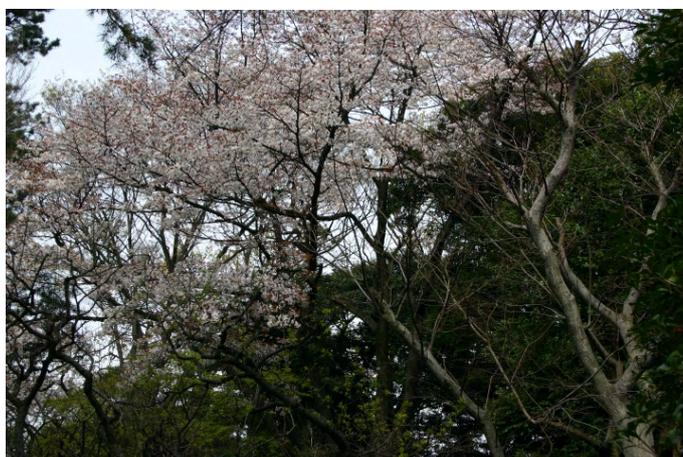


写真-27. 大田区宝来公園のヤマザクラ

よそ 20 日間程度は多摩川流域でヤマザクラの花見を楽しむことが可能である。なお、全国では奈良県の吉野山のように野生のヤマザクラを観光対象とする場合もあるが、多摩川流域では野生のヤマザクラの林分を観光用に整備している例は確認されなかった。ただし、玉川上水のヤマザクラや、公園などに植栽されているものも数多く観察されており、今後は野生のヤマザクラについて「花見」目的に管理する可能性は高いと考えられる。また、「光厳寺のヤマザクラ」のように巨樹として育成することも可能である。

●カスミザクラ *Cerasus leveilleana* (Koehne) H.Ohba

カスミザクラは丘陵部ではほとんど見られず、八王子市以西の山地で確認された。標高 200～1400m に出現しており、山地では一般的な二次林構成種であると考えられる。標高が低い地域ではヤマザクラと同所的に出現するため、混同されることも多いが、ヤマザクラと比較して花期が遅いこと、若芽が緑褐色

であることなどから遠目でも明瞭に区別することが可能である。八王子市では4月16日頃、檜原村では5月4日頃が満開であるので、ヤマザクラと同様におよそ20日間、多摩川流域で花見を楽しむことが可能である。なお、カスミザクラは花期が遅いことから他の地域でもほとんど「花見」の対象とされていないが、多摩川流域でも観賞用に整備している例は確認されなかった。ただし、花自体は観賞価値が低いものではなく、一ノ瀬高原金鶏寺のカスミザクラ（写真-29）のように、観賞価値が高いと考えられたカスミザクラも存在した。また、小金井公園でも植栽が確認されている。将来的には他のヤマザクラなどと組み合わせたサクラの名所の素材として利用が期待される。



写真-28. カスミザクラの花

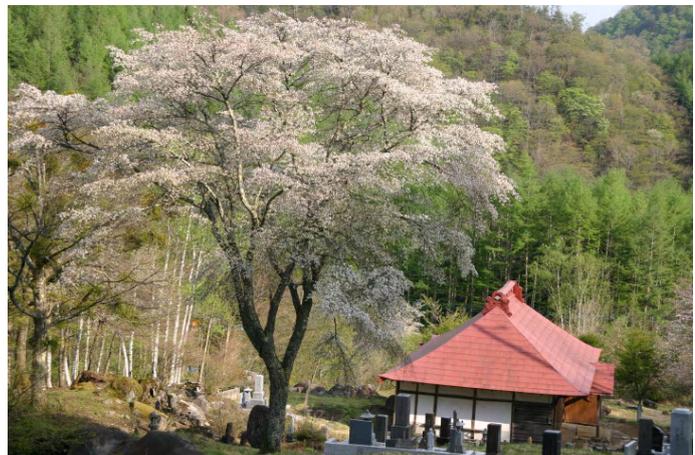


写真-29. 一ノ瀬高原金鶏寺のカスミザクラ

●オオヤマザクラ *Cerasus sargentii* (Rehder) H. Ohba var. *sargentii*

オオヤマザクラは檜原村・奥多摩町・甲州市などの山地の一部でだけ確認された。標高では800~1800mに出現しており、ヤマザクラとはあまり分布域が重なっていない。カスミザクラとは同所的に出現する場合も多いため、混同されることもあると考えられる。分布域は狭いが出現する標高域が広いため、満開の期間は4月20日頃から5月20日頃とほぼ1月の間、オオヤマザクラの花は見られる。



写真-30. オオヤマザクラの花

オオヤマザクラは北海道や東北ではヤマザクラあるいは‘染井吉野’に替わる「花見」の対象とされる場合があるが、多摩川流域でもっとも標高が高

い甲州市の一ノ瀬の集落周辺ではオオヤマザクラを明らかに植栽しており（写真－31）、観賞用に利用されていた。また、奥多摩湖など本来の生育地より低標高地でも植栽されていたことは、オオヤマザクラが「花見」の対象樹種として広く使われていることを示すものである。今後も高標高域における資源として利用が増加すると考えられる。

●エドヒガン *Cerasus spachiana* (Lavallée ex H.Otto) H.Otto

エドヒガンはカスミザクラと同様に、丘陵部ではほとんど見られず、八王子市・青梅市以西の山地で確認された。標高 200～1000m に出現しており、この点でもカスミザクラとほぼ一致している。ただし、山地の典型的な二次林であるコナラやミズナラなどの林よりも、より自然度が高い天然林で多く出現する傾向があるように思われた。開花期は 4 月 1 日頃から 5 月 1 日頃までで、ほぼ 1 月の間、多摩川流域で花見を楽しむことが可能である。エドヒガンの栽培品種の‘枝垂桜’は多くの寺社や公園に植栽されており、「花見」の対象として用いられているが、野生のエドヒガンが「花見」の対象として整備されている例はほとんど無かった。唯一、小菅村の「牛会桜」と名付けられているエドヒガンの巨木（直径お

よそ 70cm）が観光資源として活用されていた（写真－33）。なお、牛会桜の看板には「ヤマザクラ牛会桜」と表記されているが、修正すべきである。こ



写真－31. 一ノ瀬高原で見られた植栽されたオオシヤマザクラ



写真－32. エドヒガンの花



写真－33. 小菅村の「牛会桜」

のようにエドヒガンは「花見」の資源としてきわめて貴重な存在であることに加え、奥多摩町より上流域では数多くの野生個体が見られるので、今後は野生個体のさらなる活用が期待される。

● **チョウジザクラ** *Cerasus apetala* (Siebold & Zucc.) H. Ohba var. *apetala*

チョウジザクラはカスミザクラやエドヒガンよりもさらに西部の山地で確認された。標高 500～1000m に出現しており、この点でもカスミザクラなどとは分布域が多少ずれている。観察された開花期は 4月10日頃から4月20日頃までで、ほぼ 10 日間と短かったが、実際にはもっと長いと思われる。チョウジザクラは花弁の直径が約 1cm と小さいことに加え、花と同時に葉芽も展開するため、開花しても花はまったく目立たない。また大きくなってもせいぜい樹高は 4m 程度なので、「花見」の対象とはならない。今回の調査でもチョウジザクラを「花見」の対象としている例は全くなかった。しかしながら、チョウジザクラ



写真-34. チョウジザクラの花



写真-35. 満開のチョウジザクラ×エドヒガン

は種間雑種を多く形成しており、今回の調査でもヤマザクラ・エドヒガン・マメザクラなどの種間雑種が確認された。その中には明らかに「花見」目的で残されている個体も確認されており（写真-35）、将来はこうした種間雑種の素材として、「花見」に栽培品種などが利用されることが期待される。

● **ミヤマザクラ** *Cerasus maximowiczii* (Rupr.) Kom.

ミヤマザクラは今回の調査では、西部の山地の三頭山および笠取山でのみ確認された。標高 1100～1800m に出現しており、ヤマザクラやエドヒガンの出現する標高より明らかに高い。今回の調査ではこうした高標高域の調査が不十分であったため、ミヤマザクラは 2ヶ所でしか確認されなかったが、八ヶ岳などでの観察では標高 1200～2400m の亜高山域まで広く確認されていることから、

多摩川流域でもこうした高標高域に広く分布していると考えられる。開花期は開花している個体のデータが少なかったため推定となるが、5月中旬から6月中旬ごろまで開花していると思われる。ミヤマザクラの花は開花期が遅いことに加え、葉が展開したあとに開花することから「花見」の観賞用に用いられることはない。また、チョウジザクラのように種間雑種を形成することも少ないので、サクラの仲間ではあるが「花見」のサクラとしては除外してよいと考えられる。

●マメザクラ *Cerasus incisa* (Thunb. ex Murray) Loisel. var. *incisa*

今回の調査では、野生のマメザクラは小菅村と甲州市で確認された。標高500～1100mに出現している。しかし、今回確認された個体の多くは人里近い場所で確認されており、人為的な影響が疑わしく、本来の自生分布域であるのか判断するには、今後のより詳細な検討が必要と考えられる。また、ブコウマメザクラ *Cerasus incisa* var. *bukosanensis* (Honda) H. Ohba は今回の調査で確認することは出来なかった。これまでの報告から、多摩川源流部の石灰岩地にブコウマメザクラがあるとされている。踏査調査が不十分であったことから確認されなかったが、ブコウマメザクラはきわめて分布域が狭く、個体数が少ないと考えられる。マメザクラの開花期は、流域全体で見ると4月10日頃から5月1日頃のおよそ20日間であった。小菅村の三ツ子山では数十個体と比較的



写真-36. ミヤマザクラの蕾



写真-37. ミヤマザクラの花 (ハヶ岳撮影)



写真-38. マメザクラの花

まとまった集団もみられ、観光資源としての活用も可能であると思われる(写真-39)。一方、マメザクラと他種との種間雑種は町田市から甲州市まで広い範囲で観察された。エドヒガンとの種間雑種と考えられるヤブザクラ *Cerasus hisauchiana* (Koidz. ex Hisauti) H.Ohba (写真-40) とホシザクラ *Cerasus tama-clivorum* (Oohara, Seriz. & Wakab.) H.Ohba(写真-41) の他にもヤマザクラやチョウジザクラとの種間雑種と考えられる個体が確認された。こうした種類の中でもヤブザクラとホシザクラは開花期が‘染井吉野’よりも数日早いことに加え、花付きがよく、花弁の色も淡紅色であり、観賞価値が高い。また、管理も比較的容易であること、挿し木で容易に増えることなどの性質を考えると、公園などに「花見」目的で用いる樹種としてはきわめて利用価値が高い。さらに、ヤブザクラとホシザクラは一部相模川流域にも分布しているが、多摩川流域が分布の中心地である。郷土樹種としての価値も極めて高いことから、今後はヤブザクラとホシザクラを積極的に利用していくことを検討するべきである。

●タカネザクラ *Cerasus nipponica* (Matsum.) H.Ohba var. *nipponica*

タカネザクラは今回の調査では笠取山でのみ観察された。出現した標高は1600~1900mであった。この標高域ではオオヤマザクラも同所的に分布しており、種間雑種を形成している可能性も考えられるので、注意して同定する必要



写真-39. ミツ子山で見られたマメザクラ



写真-40. 公園に残されていたヤブザクラの木



写真-41. ホシザクラの花

がある。なお、タカネザクラはこうした山地帯上部から亜高山帯域には広く分布することが知られており、多摩川流域でも笠取山だけではなく、雲取山などに広く分布していると想定される。開花期は5月10日頃から5月20日頃まで観察されたが、実際にはもっと高標高域ではさらに遅く6月まで開花していると考えられる。なお、



写真-42. タカネザクラの花

タカネザクラの花自体はマメザクラなどと同様に観賞に堪える性質をもっているが、花と同時に葉芽が展開する個体が多く目立たないこと（写真-43）、低標高域では育成が困難であることなどから「花見」の観賞用に用いられることは少ない。しかし、タカネザクラはオオヤマ

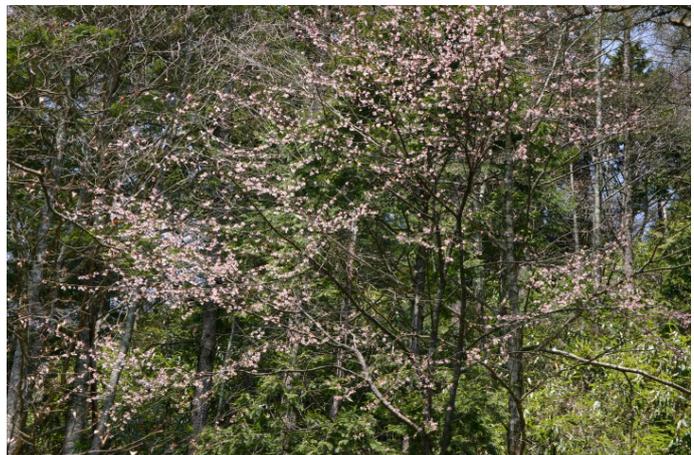


写真-43. 笠取山で見られたタカネザクラ

ザクラよりも高標高域に分布しており、笠取小屋周辺（写真-23）で見られたように、高標高域では活用することが可能であり、今後はこうした地域においてより有効に用いることが考えられる。

### ●その他のサクラ

多摩川流域に本来自生しているサクラ類はすでに述べた8種のみであるが、それ以外に栽培されていた個体から逸出したサクラ類が確認されている。オオシマザクラ *Cerasus speciosa* (Koidz.) H.Ohba は本来伊豆半島や伊豆諸島に分布する種であるが、関東南部では江戸時代以前より薪炭林に植栽されて



写真-44. 川崎市で見られたオオシマザクラ

きた歴史がある。今回の調査でもこうした薪炭林由来と考えられるオオシマザクラが町田市などで確認された。また、近年では「花見」の観賞用に公園などにオオシマザクラが植栽されることも多く、こうした植栽されたオオシマザクラから散布された種子に由来すると考えられる個体も八王子市や川崎市などで確認された（写真－44）。また、多摩川流域でもっとも数多く植栽されている‘染井吉野’についても近くのオオシマザクラやヤマザクラと交雑したと考えられる個体が生じていることが確認されており、こうした「遺伝子汚染」が問題となっている。‘染井吉野’は比較的繁殖力が弱いため大規模に‘染井吉野’由来の個体が増殖することはないと考えられるが、あまりにも多くの‘染井吉野’が植栽されており、今後は「遺伝子汚染」について注意していく必要がある。また、自生のサクラは、地域ごとにそれぞれ特徴がある遺伝的変異を保有している。同じ種であっても、他産地のサクラを植栽することで、自生のサクラに対して遺伝的攪乱を引き起こし、その存続に深刻な影響を与える危険性が指摘されている。つまり、他の産地の苗を安易に導入することも「遺伝子汚染」となりうる。したがって「遺伝子汚染」に配慮すると、野生のサクラが分布する地域において「花見」のサクラを整備する場合、今後は安易に‘染井吉野’やオオシマザクラ、および他産地のサクラを植栽するのではなく、可能な限り自生のサクラを増殖して植栽することが望まれる。

## 5. まとめ

平成 19 年度のアンケート調査や平成 20・21 年度の現地調査をもとに、合計 189 ヶ所 516 地点のサクラの名所候補地について現地調査をおこなった。この結果から、各調査箇所を 4 タイプに区分するとともに、観賞価値のランク付けをおこなった。**堤防・水路タイプ**はもっとも多摩川流域のサクラを特徴づけるものである。しかし小金井堤が衰退していることに象徴され得るように、今後は管理が大きな問題となると予測される。**街路・並木タイプ**はもっとも身近にサクラと接するものであるが、多くの場合環境が劣悪で、短い期間で衰退することが予想される。**公園・施設タイプ**は‘染井吉野’以外のサクラも含まれ、お花見の場としても重要なタイプである。**寺社・名木タイプ**は観光資源としてもっとも重要であるが、多摩川流域では数が少なかった。このうち、寺社・名木タイプの除く 3 タイプの多くで、‘染井吉野’が植栽されていた。また、ランク付けをおこなった結果、玉川上水の**小金井堤**や**羽村堤**など堤防・水路タイプ

は 14 ヶ所、国立市の大学通り緑地帯など街路・並木タイプは 12 ヶ所、新宿御苑や多磨霊園、多磨森林科学園など公園・施設タイプは 26 ヶ所、寺社・名木タイプは 17 ヶ所がランク 1・2 と判断され、この合計 58 ヶ所が観光資源としてのサクラの名所と考えられた。この 58 ヶ所は遠方からの観光客を誘致する価値が高く、残りの箇所については地元住民向けのサクラとしての役割が大きいと考えられた。

観光資源として今後の利活用をおこなう為には、こうした資源のバランスを考えたうえで、長期にわたる計画を策定・実施する必要がある。名所数としては 58 ヶ所と決して少ない数ではないので、今後は新たに植栽するよりも、**良好な環境を維持するための管理**が求められる。特に‘染井吉野’は充分すぎるほど植栽されていることに加え、遺伝子汚染や病虫害の発生源の問題をもつ。したがって、‘染井吉野’は**新たに植栽するべきではない**と考えられた。また、今回の調査では交通アクセスや観光客の受け入れ体制、イベントなどの効果、管理体制など社会的要素の考察までは至らなかったため、今後の課題となった。

一方、野生のサクラの調査では、**8 種のサクラ**の分布状況の概要が把握され、多摩川流域に多様なサクラが自生していることが示された。なかでも分布が確認されたエドヒガンとオオヤマザクラ、ヤブザクラ、ホシザクラについては観賞価値が高く今後の活用が考えられた。しかしながら、最も希少なブコウマメザクラは多摩川流域で確認することが出来ず、観光資源としての利用は難しいと考えられた。